

## 村稲作現況とライスセンター運営に関して / 野甫英芳

『村の稲作の現況とライスセンターの運営に関して』お伺いたします。伊平屋村の田植え、稲作の状況は年々減反傾向にあります。今年の9月よりライスセンターが稼働する予定であります。農業従事者も高齢化が進んで、稲作の増産が進まない危機的な状況にあります。減反になりまして、村としてこういう状況を見て「今後の農業の発展とか推進とか、行政として考えているか」というところをお伺いします。よろしくお願ひします。

■議長（金城信光） 答弁、農林水産課長。

■伊礼直樹農林水産課長 野甫議員の一般質問にお答えします。まず、島の農業従事者が今現在、水稲で18名、サトウキビ48名、畜産13名、その他、玉ねぎ、かぼちゃ、イモですね、作目ごとに重複がありますが13名となっております。今年度の作付け面積は約42haのため、<sup>なまもみ</sup>生粳で約200t、玄米で約140tとなる予想となっております。ここ四、五年は同様の状況であります。ライスセンターの処理能力は日当り30t、生粳の受け入れとなります。精米で時間当たり1.5t、梱包、5kg袋で分当り6袋、時間当たりにすると1.8tという処理能力となります。

先ほどの、高齢化が進み後継者も減少しているが、今後の農業推進はどうするかということではありますが、水稲の振興においては、現在営農している農家の後継者による引継ぎや、サトウキビなどを生産する農家による経営拡大等が望ましいと考えられるものの、現状としては厳しいものであると考えております。その他の打開策としては、他業種からの参入推進、具体的には土木建築業者による参入が効果的ではないかと考えております。理由としては、日常的に重機等を操縦しているため農機具の操縦に支障がないことや、工事における工程管理の経験は、年間をとおし

た営農計画の管理と類似していること、年度当初の工事閑散期が農業の繁忙期にあたることなどにあり、先に開催した村内建設業界との意見交換会において、農業参入について検討を依頼したところ、「前向きに検討したい。」という意見がありました。

また、若者未来会議の場において、農業に参入したいという意見とあわせて、必要な手続き等についても不明な点があるとのことではありました。そのため、営農の開始にあたり、農地の<sup>転換</sup>や栽培技術にかかる講習会の開催など、必要な支援について適宜対応するべく、新規就農窓口については改めて口頭により周知していきたいと考えています。

先ほどの津田議員とも重複しますが、農業推進していくためには伊平屋村長期営農計画というものを作成して、課題を出して、伊平屋村が十年二十年後どういった方向を示していくかというのを、検討委員会を立ち上げて今後の施策等について進められればと考えています。以上です。

■議長（金城信光） 野甫議員。

■7番 野甫英芳議員 今、農業人口の皆さんが、先ほどおっしゃったように村内で18名しかいないということであります。それから稲作の、昔は伊平屋村はほぼ田んぼだったんですね。今それが、農業が転換して全部サトウキビになっているんですね。ライスセンターは新しくできて、田んぼが減って行って、農業従事者も減って行ってという状況がこのまま続くと、農業が危機的な状況になるということがよく分かります。

各地域も「不毛耕作地が増えて大変なことになっている」という話を、農業委員会の皆さんがやるんですけど、「じゃあ皆さんで考えたらどうか。」と農業委員会の皆さんに言ったら、「俺たちが考えることじゃない。」と、「これは行政が考えるこ

となんだよ。」とかって言いますので、じゃあ誰が考えて推進していくのかというところが、非常に肝心だと思ってこの質問をしているわけですけど、村長、どう思いますか。ご答弁お願いします。

■議長（金城信光） 答弁、名嘉律夫村長。

■名嘉律夫村長 野甫議員の質問にお答えします。先ほど農林水産課長からも答弁があったとおり、今後の農業の在り方としてなんですけども、やはり法人化をしていくということですね。先ほど議員がおっしゃっていた「昔は田んぼだった」って言うんですけど、現在、あのような状況で農業経営をしても、とりあえず儲けにならないというのが本音です。面積なんですね。やはり企業がもし参入してくるんであれば、広大な面積を担うっていうのがまず第一条件だと思います。ですから、伊平屋村では 24ha なんですけども、県外では二人、三人ぐらいでこれだけの面積をこなしている状況です。企業としてやっていますので。そういうことなので、今後の方針として、やはり「企業が農業に参入していくというのが、農業を進めるうえでは一つの大きな条件なのかな」と思います。

ですから、今、我喜屋区においてもかなり水田がサトウキビに転換しているわけなんです。放棄はしないと思うんですけども、高齢化とともに、担い手がどんどんサトウキビも含めて減っていくと。そういうことも踏まえて、「いずれはまた水田に戻していく」ということをしていくのが、今後の稲作を継続していくことにつながるのかなと思っております。

ですから、非常に懸念することはもちろんそうですけれども、「どうやったらこの問題を解決していくか」というのが大きな課題であるんですけども、今言う、法人化をして面積を確保していけば、「企業の皆さんもおそらく参入してくるだろ

う」ということになるのかなと思います。いずれは補助事業で機械導入のメニューがあれば、そういうことも考えていきたいと思っています。

そういうわけで、大変なことなんですけれども、これから少しではありますけど、おそらく農業協同組合は「水稻は増えていくのかな」と思っております。時間はかかりますけれども、もともと伊平屋村は、米の産地ですので、あとはブランド化するのは農家さん次第です。良い米を作って、島の一つの沖縄を代表するブランドとして確立していければと思いますので、その点はみんなで考えていきたいと思っています。以上です。

■議長（金城信光） 野甫議員。

■7番 野甫英芳議員 村長が今おっしゃったことを現実にやっていただくことができれば、「農業法人化、企業化とかいろいろありますので、かなり期待はもてるかな」と思うんですけど、ぜひやっていただきたいと思っています。これを主導して、実際に行動して具体的にやりあげるのは行政しかできないんじゃないかと思っていますので、行政の皆さんも大変だとは思いますが、ぜひ頑張ってやっていただきたいと思っています。よろしく願いいたします。この質問はこれで終わります、次の質問にいきます。